

★千葉県

事務局 〒285 千葉県佐倉市下志津263 県立佐倉西高等学校内
高橋 靖夫 TEL043-489-5881

歴代会長

初代 右島 四郎 (昭和31年～)

第2代 三橋 渉三 (平成4年～)

第3代 大澤 一治 (平成7年～)

〈沿革〉

協会創立以前

千葉県のウエイトリフティングの歴史は、竹田斌に始まると言える。竹田は、戦後仕事の関係から船橋市に移住し、材木業の手伝いをする傍ら、器械体操が好きで宙返りや手製のバーベルやトロッコの車輪を自己流で挙げ鍛錬していた。自己流の練習に限界を感じた同氏は、本格的に器械体操の技術を習得するため東京のYMCAに通うこととなった。そこで、正規のバーベルと出会い、何度か手にしているうちに当時のF級のPの日本記録を挙げたことが大きなきっかけとなり、本格的に本競技を実施することとなった。周囲の人から、国体に出場したらという話が持ちあがり、船橋市相撲協会の武藤惣吉の世話により第7回国体に本県からはじめて出場した。

竹田選手を中心に内海勝治、鈴木光夫、熊谷政久、朝倉弘、吉田秀正、井田浩史等が集まり競技人口も次第に増加していった。

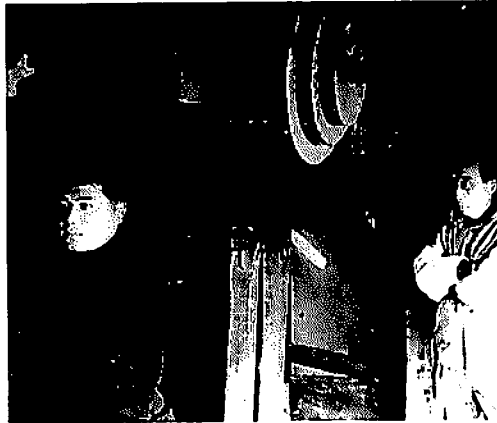
協会創立に至る経緯

昭和27年第7回国体にF級で出場した無名の新人である竹田斌は、日本タイ記録の247.5kg(大会新記録)で優勝した。この結果、船橋に後援会ができた。その後、船橋ウエイトリフティング協会の誕生となり、会長に右島四郎が就任した。

この当時の練習は、船橋の公民館で行っていたが、公民館改築のため右島会長は、自己所有の一軒家を練習場として開放し(右島道場と名付ける)、私費を投じて練習器具を購入するなどして選手育成に尽力した。

昭和28年の第8回国体では、竹田がF級で262.5kgの日本記録で2連勝を果たした。竹田は、この競技会を最後に引退した。

昭和30年の第10回国体からは、ま



右島道場で練習する渡辺泰行、右は右島会長

まった選手団を送るようになった。

そして、昭和31年に千葉県ウエイトリフティング協会が発足し、千葉県体育協会に加盟した。昭代会長に右島四郎が就任した。

〈年次別概況〉

昭和27年

竹田斌は、第7回国体に出場しF級で247.5kgの日本タイ記録(大会新記録)で優勝した。また、第12回全日本選手権大会でもF級で優勝した。

昭和28年

第8回国体には、中台久男監督、F級竹田斌、B級内海勝治が出場した。竹田は、F級で2連勝するとともに、Pで85kg、Sで77.5kg、Tで262.5kgの日本記録を樹立し優勝に華を添えた。また、第13回全日本選手権大会でもF級で2連勝した。B級の内海勝治もよく健闘しTで200kgをマークした。

昭和31年

千葉県協会が設立され、会長に右島四郎が就任した。

第2回関東選手権大会を船橋市で開催し、総合で3位に入賞した。

昭和33年

第13回国体でLH級の山田繁(早稲田大学)が入賞した。

昭和34年

第14回国体で初の総合6位入賞を、Fe

級の武田文男(早稲田大学)の優勝を原動力に果たした。

昭和35年

第15回国体でF級の広末晴彦(早稲田大学)が2位に、LH級の加藤武(早稲田大学)が3位に入賞し、一般の部で7位に入賞。

昭和36年

中学生より右島道場で練習していた内海勝利が習志野高校に入学し、愛好者を集め、山口久太校長の理解もあり県内で初の同好会が発足し、本競技の高等学校でのスタートとなった。

第15回国体では、L級の斉藤和之(中央大学)が4位に入賞した。

昭和38年

Fe級の内海勝利が高校生として初の関東選手権大会で3位入賞を果たすと同時に全国高校総体にも県内高校生としては、初の出場をした。

昭和39年

関東選手権大会で、藤村繁がB級で3位に入賞した。

昭和40年

習志野高校の同好者も徐々に増え、山口校長の理解で練習場が完成した。関東選手権大会で、篠宮稔がLH級で2位に入賞した。

昭和41年

理事長に山口俊章が就任した。渡辺泰行(中央大学・職)は、第26回全日本選手権大会のLH級で第3位に入賞した。同選手は第1回日韓親善大会の代表としてソウルに派遣された。

昭和42年

過去、なかなか全国高校総体で入賞できなかったが、三石悦雄(習志野高)は、第14回大会のLH級で2位に入賞した。Sで日本高校記録を更新したが、競技後の再検量の結果、体重が不足していた事から公認はされなかった。しかし、東京都の大会への出場を依頼し、秋にはLH級でS122.5kg・T387.5kgの高校新記録を、春にはM級でT380kg

の高校新記録を樹立した。この記録は、3種目時代には破られず、2種目時代の基準記録として採用された。

第22回国体で、MH級の多小田一紀(法政大学)が第2位に、H級の藤森正靖(津田沼病院)は第5位に入賞した。

昭和43年

第23回国体で、Fe級の白井勝(二宮小教)が5位に、M級の三石悦雄(法政大学)と、MH級の渡辺泰行(中央大学・職)がそれぞれ3位に入賞した。

昭和44年

本県選手では初の世界記録を、三石悦雄(法政大学)が「世界記録に挑戦する会」において樹立した。記録は、M級S 133kgのジュニア世界記録である。

第24回国体で、Fe級の白井勝(二宮小教)が3位に、MH級の篠宮稔(日本大学)が7位に、H級の渡辺泰行(中央大学・職)が4位に入賞し、一般の部で5位となった。

昭和45年

国分高校に篠宮稔が赴任し、同好会を発足した。県下で2番目の高校実施校となる。千葉県高等学校体育連盟に加盟申請をしたところ、翌年に関東高校大会を控えていること、国体開催が近いこと等が手伝い、理事会・代議員会で26番目の専門部として承認された。

第25回国体で、Fe級の白井勝が5位に、LH級の三石悦雄が3位に、H級の渡辺泰行が2位に入賞した。

千葉国体を3年後に控え、そのリハーサル大会として、第7回全日本社会人選手権大会を、船橋市立海神中学校体育館で開催した。

昭和46年

県高体連にWL専門部が設置され、初代部長に目良弘(国分高・教頭)が就任した。

第4回関東高校大会を、千葉市公園体育館で開催した。

第13回全国高校総体では、大塚秀樹(習志野高)がLH級で4位に入賞した。また、2年目の国分高の深山武晴は、関東選手権大会B級で優勝するなど、国分高も徐々に力をつけてきた。

第26回国体で、Fe級の白井勝が5位に、H級の渡辺泰行が2位に入賞した。

昭和47年

第32回全日本選手権大会兼ミュンヘンオリンピック大会最終選考会を船橋市の日本建鉄体育館で開催した。同大会に参加した、Fe級の白井勝(二宮小教)が5位に、M級の石川隆一(八千代高・教)が4位に、LH級の稲葉忠(東洋エンジニアリング)が5位に、H級の渡

辺泰行(中央大学・職)が2位に、同級の篠宮稔(国分高・教)が5位にそれぞれ入賞した。

高校実施校が、八千代高に石川隆一が赴任したことにより3校となった。

第16回関東選手権大会において、高校の部で優勝し、国体高校の部の出場権を初めて獲得した。B級は矢口秀次(国分高)が、L級は石井良和(習志野高)が、LH級は芝野賢悟(国分高)がそれぞれ優勝したことが原動力となった。第19回全国高校総体では、石井良和(習志野高)がL級で3位に、LH級では芝野賢悟(国分高)が2年生ながら5位に入賞した。

関東高校大会で、習志野高が団体で準優勝を果たした。

第27回国体には、一般・高校そろっての参加となった。高校の部では、L級の石井良和が3位、M級の谷古宇武(習志野高)が5位に、LH級の芝野賢悟が6位に入賞したが、種別では予想を下回り8位に終わってしまった。一般の部では、白井勝・石川隆一・三石悦雄(船橋市役所)・渡辺泰行の活躍で種別6位に入賞した。

昭和48年

右島県協会会長が、千葉県体育協会副会長に就任した。

第33回全日本選手権大会において、F級の植木守(千葉県教育庁)は、J種目で127.5kgの日本記録を樹立し2位に入賞し、世界選手権大会の代表となった。世界大会では、実力を発揮できず12位の成績であった。

千葉県で開催する初めての国体に向けて、協会総力をあげて選手強化に努力してきた。結果は、総合4位の成績を残すことができた。高校の部では、F級の金子喜彦(習志野高)が5位、B級の加藤則雄(習志野高)が8位、L級の工藤陽久(国分高)が5位、M級の芝野賢悟(国分高)が5位、LH級の大日方敦(国分高)が4位にと、全員が入賞した。一般の部では、F級の植木守(千葉県教育庁)が3位、B級の松ヶ追恵生(ユアサフナショク)が5位、M級の三石悦雄(ミナト興産)が4位、LH級の石川隆一(八千代高・教)が6位、H級の渡辺泰行(中央大学・職)が2位に入賞した。

昭和49年

松戸東高校(現・松戸国際高校)に植木守が赴任し同好会を発足させた。

第34回全日本選手権大会で、三石悦雄(ミナト興産)はM級で優勝し、第7回アジア競技大会の代表となった。同大

会で、見事Sで金メダル・Tで銀メダルを獲得した。

第29回国体は、B級の松ヶ追恵生が7位、M級の三石悦雄が優勝、H級の渡辺泰行が3位と健闘し、種別で4位に総合でも8位に入賞し天皇杯得点を獲得した。

昭和50年

第1回日中友好大会に、三石悦雄と渡辺泰行の両名が選考された、中国の北京と杭州の2カ所で大会が開催され、三石は両大会M級で優勝した。

第10回日韓親善大会(北九州市)には、渡辺泰行が代表としてH級で参加し優勝した。

第22回全国高校総体では、大日方敦(国分高)がMH級で4位に入賞した。

第30回国体から参加基準の変更があり、各都道府県とも少年の部3名、成年の部4名の選手が予選なしで出場できるようになった。M級の三石悦雄が3位、LH級の石川隆一が6位、H級の渡辺泰行が4位に入賞した。

昭和51年

第23回全国高校総体では、小林明宏(習志野高)が、2年生ながらMH級で4位に入賞した。

第2回日中友好大会は、大阪と横浜の2会場で開催され、昨年参加した三石・渡辺の両選手が横浜大会に出場した。第31回国体で、LH級の石川隆一が4位、H級の渡辺泰行が3位に、少年の部でも小林明宏がLH級で4位に入賞した。

昭和52年

全国高校総体で県下で、初の優勝を82.5kg級の小林明宏(習志野高)が達成した。同選手は、第32回国体でも優勝し高校2大タイトルを獲得した。

第10回関東高校大会を船橋市民体育館で開催した。

渡辺泰行は、バンノニア国際大会に100kg級で出場した。

千葉県民体育大会にオープン競技として参加できるようになり、6市より50余名の参加選手のもと開催した。

松戸南高校に篠宮が転勤し、同好会を設立し、県内5校目の実施校となる。

昭和53年

ソウルで開催された第13回日韓親善大会に、山口俊章(県協会理事長)が監督として参加した。

フィリピンで開催された第2回国際ユース大会コーチとして篠宮稔が、82.5kg級選手に小林明宏(法政大学)が代表として参加、小林は、3位に入賞した。第38回全日本選手権大会では、75kg級

の石井良和(明治産業)及び82.5kg級の石川隆一が5位に、110kg級の渡辺泰行が2位に入賞した。

第33回国体少年の部では、75kg級の新谷耕治(市立船橋高)が3位に、成年の部では、82.5kg級の三石悦雄(行徳高・教)が5位に入賞した。

昭和54年

茨城県と韓国・京畿道との親善大会が、関東対京畿道との親善大会に発展した。その関係で、石井良和(明治産業)が75kg級の代表として出場し優勝した。

篠宮は、日本体育協会の海外コーチ研修として、愛知県の子金子定廣氏とともに東ドイツ・ハンガリー・西ドイツ各国を1ヶ月半にわたり視察研修し、その成果を発表した。

第34回国体の成年の部では三石悦雄(行徳高・教)が2階級あげて100kg級で挑戦し見事優勝した。少年の部では、75kg級の石田裕二(八千代高)が8位に、90kg級の小島一仁(松戸東高)が8位に入賞した。

昭和55年

この年より、県民体育大会の正式種目として実施できるようになった。

三石悦雄が八千代松陰高校に赴任し部を設置し合計6校となった。その後、国分高が廃部となった。

第35回国体の成年の部では60kg級の堀江一到(市川工業高・教)が8位に、75kg級の石井良和が6位に、82.5kg級の小林明宏(法政大学)が7位に、少年の部では、75kg級の菅原吉和(八千代高)が8位に入賞した。

昭和56年

君津農林高校に植木守が赴任し、創部した。

第36回国体の成年の部では60kg級の堀江一到(市川工業高・教)が8位に、67.5kg級の斎藤秀男(船橋法典高・教)が7位に、82.5kg級の小林明宏(法政大学)が3位に、少年の部では、56kg級の照沼光彰(松戸東高)が5位に、67.5kg級の丸山一夫(松戸南高)が6位に、82.5kg級の菅原吉和(八千代高)が4位に入賞した。

少年の部で7位に入賞したが、総合では得点に結びつかなかった。

昭和57年

右島会長は、これまでの功績により勲五等瑞宝章受賞の栄に輝いた。

津田沼高校と船橋法典高校の2校が創部し合計8校の実施となった。

第24回全国高校総体で、52kg級の長島誠(松戸南高)は、J種目で堂々の2位

に入賞した。

第37回国体の成年の部では50kg級の堀江一到が7位に、67.5kg級の斎藤秀男が3位に、110kg級の仁科健太郎(船橋高校・教)が7位に入賞した。少年の部では、52kg級の加瀬勝己(八千代松陰高)が5位に入賞した。

昭和58年

関東高校大会において、松戸南高校は、石川勝敬・岩崎裕昭・花田浩二の活躍により、団体成績3位と健闘した。

第30回全国高校総体で、56kg級の平間哲二(八千代高)が5位に入賞した。

第38回国体の成年の部では67.5kg級の斎藤秀男が4位に、82.5kg級の三石悦雄(八千代松陰高・教)が7位に、+110級の仁科健太郎が5位に、少年の部では、56kg級の平間哲二(八千代高)が6位、60kg級の石田勝敬(松戸南高)が4位、75kg級の花田浩二(松戸南高)が4位に入賞した。

昭和59年

第31回全国高校総体で、82.5kg級の桜井雅充(八千代松陰高)が4位に入賞した。

第39回国体の成年の部では90kg級の三石悦雄が7位に、+110kg級の仁科健太郎(松戸南高・教)が5位に入賞した。

昭和60年

初心者を対象とした採点制競技会が制度化されたことに伴い、県大会の前段に実施することとした。

第18回関東高校大会を千葉県総合運動場体育館で開催した。

流山中央高校に植木が転勤し創部し、高校の加盟が10校となった。

第40回国体の成年の部では、90kg級の三石悦雄が3位に、+110kg級の仁科健太郎が7位に、少年の部では、60kg級の古林哲茂(八千代松陰高)が5位に、75kg級の斎藤政利(船橋法典高)が8位に入賞した。

第1回関東高校選抜大会を、野田市の「大利根チサンホテル体育館」で開催した。56kg級の藤里智(津田沼高)と、90kg級の辻賢太郎(松戸南高)の両名が優勝した。

昭和61年

第30回関東選手権大会を千葉公園体育館で開催した。

秀明八千代高校に新谷耕治が赴任し創部した。

第33回全国高校総体で、52kg級の甲斐伸次郎(津田沼高)が6位に、90kg級の辻賢太郎(松戸南高)が5位に入賞した。

第41回国体では、松戸南高校の師弟コ

ンビである、成年の仁科健太郎が5位に、少年の辻賢太郎が4位に入賞した。関東高校選抜大会を、前年に引続き同会場で開催した。八千代松陰高校の加藤一成と仲田裕行が優勝した。

第2回全国高校選抜大会には、8名が選抜され6名が入賞した。

昭和62年

関東高校大会団体準優勝の八千代松陰高校は、第34回全国高校総体で県下では初の総合5位に入賞した。52kg級の西村修一が7位、60kg級の加藤一成が3位に入賞した。

布佐高校に恩田秀勝が赴任し創部した。

第42回国体は、52kg級の西村修一(八千代松陰高)が5位に、加藤一成(八千代松陰高)が3位に入賞した。

第1回全国女子選手権大会で、44kg級の内田典子(船橋法典高)が優勝した。

第3回全国高校選抜大会及び第3回関東高校選抜大会の両大会で、60kg級の加藤一成(八千代松陰高)、67.5kg級の水野英郎(津田沼高)、82.5kg級の節田英昭(松戸東高)の3名が優勝した。

昭和63年

勤務の関係から、砂岡良治(ユニデン)が千葉に移籍した。

第2回全国女子選手権大会で、44kg級の内田典子(船橋法典高)が2連勝した。

第48回全日本選手権大会では、移籍した砂岡良治が、82.5kg級でS・J・Tともにアジア新記録を樹立し圧勝した。第35回全国高校総体で、昨年度末活躍した加藤一成が優勝、水野英郎と節田英昭の両名が準優勝と活躍した。

第10回日韓ユース大会を千葉公園体育館で開催した。加藤一成と水野英郎が代表として出場した。

第24回オリンピック・ソウル大会に、砂岡良治が82.5kg級で出場し、6位に入賞した。

第43回国体は、60kg級の加藤一成(八千代松陰高)が優勝し高校3ビッグ大会のタイトルを獲得した。

平成元年

第35回全国高校総体で、52kg級の秋田太郎(八千代松陰高)が3位に入賞した。同選手は、第44回国体でもS・Jで2位に、Tで優勝した。同大会で、成年の部の67.5kg級の水野英郎(日本大学)は、Tで5位に、90kg級の三石悦雄(八千代松陰高・教)は5位に、100kg級の高村義隆(日本体育大学)は、7位に入賞した。

平成2年

第11回全日本ジュニア選手権大会で、67.5kg級の水野英郎(日本大学)が2位に、82.5kg級の節田英昭(日本大学)が3位に入賞した。水野は、第16回ジュニア世界選手権大会に選考され10位となった。

第50回全日本選手権大会で、67.5kg級の水野英郎と82.5kg級の砂岡良治(ユニデン)の両名が優勝し、第11回アジア競技大会に出場し、両名とも銅メダルを獲得した。

特色ある学校づくりの一環として、松戸東高校(現松戸国際高)に、専用ウェイトリフティング場が竣工し、落成を兼ねて県高校総合体育大会を開催した。7月同会場で、アジア競技大会の女子の最終選考会も実施した。

専用施設の完成により、この年から強化対策の第一歩として、高校1年生の合同合宿を実施しはじめた。

第37回全国高校総体で、60kg級の中村謙一(八千代西高)が6位に入賞した。

第45回国体の少年の部では、60kg級の中村謙一が6位に、67.5kg級の福田司(津田沼高)が8位に、成年の部では、52kg級の秋田太郎(早稲田大学)が7位に、67.5kg級の水野英郎が2位に、100kg級の高村義隆(日本体育大学)が8位に入賞した。

平成3年

第51回全日本選手権大会で砂岡良治は史上初の11回優勝を飾った。

第38回全国高校総体では、67.5kg級北川和彦(津田沼高)がSで、75kg級の伊藤正登(津田沼高)がJで優勝した。

第46回国体の少年の部では、津田沼高校の56kg級元井祐輔と67.5kg級北川和彦及び75kg級伊藤正登の3人が活躍した。伊藤は、SとTで優勝した。成年の部では、75kg級の水野英郎が3番目で、90kg級の節田英昭がJで優勝した。100kg級の高村義隆もSで5位に入賞した。

第23回アジア選手権大会は、バルセロナ・オリンピック大会の参加資格獲得大会として茨城県神栖で開催され、75kg級の水野英郎が出場した。Jの日本記録を樹立したが4位にとどまった。第7回全国選抜大会を千葉ポートアリーナで開催した。82.5kg級の宇賀章善(津田沼高)が7位と健闘した。

平成4年

右島会長の逝去により、第2代会長に三橋涉三(鎌ヶ谷市議会議員)が就任した。

第25回オリンピック大会代表選手選考会において、75kg級の水野英郎(日本大

学)と82.5kg級の砂岡良治(ユニデン)の両名が代表として内定した。檜舞台のバルセロナでは、両名とも実力が発揮できず、水野は21位、砂岡はJで失格という結果であった。

第52回全日本選手権大会を千葉ポートアリーナで開催、75kg級の水野が優勝、90kg級の節田が3位、100kg級の高村義隆(県総合運動場)が5位と活躍した。

第39回全国高校総体では、67.5kg級飯塚将信(八千代松陰高)が4位、82.5kg級の小川哲也(布佐高)が準優勝にと入賞した。

第47回国体で初の総合優勝し、大会会長トロフィーを手にすることができた。少年の部では、82.5kg級の小川哲也が3位に、67.5kg級の飯塚将信が5位に、成年の部では、82.5kg級の砂岡良治が優勝、75kg級の水野英郎が準優勝、90kg級の節田英昭が3位に、100kg級の高村義隆が5位と活躍し京都府・山梨県の追撃をかわした。

第8回全国高校選抜大会では、70kg級の日高雄作(八千代松陰高)が5位に、99kg級の三木栄作(秀明八千代高)が3位に入賞した。

平成5年

昨年に続き、千葉ポートアリーナで第53回全日本選手権大会を開催した。76kg級の水野英郎(ユニデン)は連勝した。水野は世界選手権大会でJ190kgの日本記録を樹立し9位となった。

第26回関東高校大会を千葉公園体育館で開催した。

三木栄作と日高雄作は、全国高校総体及び国体で入賞した。国体成年の部では、水野英郎と節田英昭が活躍した。

平成6年

第54回全日本選手権大会で、76kg級水野英郎が優勝、83kg級節田英昭が3位と活躍した。

第20回ジュニア世界選手権大会のレフリーとして、篠宮稔がIWFの指名により参加した。

第41回全国高校総体で、91kg級の田中祐介(松戸国際高)はSで大会記録を樹立した。

広島で開催された第12回アジア競技大会で、水野英郎は76kg級で銀メダルを



平成4年、第47回国体で初の総合優勝

獲得した。

第49回国体の少年の部では、99kg級の田中祐介が6位に、91kg級の清水良隆(八千代西高)が7位に、成年の部では、76kg級の水野英郎が優勝、83kg級の節田英昭が3位、70kg級の宇賀章善(日本大学)が7位に入賞した。

平成7年

三橋会長の逝去により、第3代会長に大澤一治(八千代市長)が就任した。

第55回全日本選手権大会で、76kg級の水野英郎は4連勝した。

第42回全国高校総体では、91kg級の清水良隆(八千代西高)が準優勝した。

第50回国体の少年の部では、64kg級の松崎信吾(八千代西高)が7位に、91kg級の清水良隆が3位に、成年の部では、76kg級の水野英郎が圧勝した。

第11回関東高校選抜大会を九十九里浜・白子町で開催した。

<現役員>

会 長	大澤 一治		
副 会 長	山口 俊章		
理 事 長	山口 俊章		
副 理 事 長	篠宮 稔		
理 事	三石 悦雄	植木 守	
	千本松隆俊	仁科健太郎	
	水井 英司	高橋 靖夫	
	長谷川 強	石井 良和	
	工藤 陽久	新谷 耕治	
	白井 勝	東 崇安	
	桜井 雅充	高村 義隆	
	石川 隆一	黒田 伸一	
	恩田 秀勝	水野 英郎	
	節田 英昭		

東京都

歴代会長	初代	桑原用二郎	(昭和26年～)
	代行	飯田 一郎	(昭和29年)
	第2代	田原 春次	(昭和30年～)
	第3代	岡崎 英城	(昭和33年～)
	第4代	浜野 清吾	(昭和35年)
	第5代	斎藤 清亮	(昭和36年)
	第6代	笹野 好男	(昭和37年～)
	第7代	中村 梅吉	(昭和48年～)
	第8代	三枝 三郎	(昭和50年～)
	第9代	佐藤 隆	(昭和57年～)
	第10代	宮下武四郎	(昭和63年～)

事務局 〒162 東京都新宿区若松町14-1 警視庁第八機動隊内
松尾 謙賢 TEL 03-3202-0551(内)29

〈沿革〉

創立まで

昭和23年第1回都民大会が開催された。都民であれば誰でも参加できるので、当時YMCAで練習をしていた12～13名が出場し、それぞれ選手、審判、役員を兼ねて試合を行った。

東京都選手権は国体予選会を兼ねて行われたが、当時は東京都協会が正式に発足していなかったため、審判は戦前の選手であった。赤嶺茂、飯田一郎、小山高栄らなど、軽量級が重量級の、重量級は軽量級の選手が審判をして試合を行うという、現在では考えられない状況であった。

その当時の日本協会は、御茶の水の本造の建物にあり、東京都協会はその軒を借りていたような状態であった。

東京都協会の正式な設立がせまられた中、その頃、YMCAで練習していた20代の若い選手の中で年長者であった内藤義治が音頭を取り、中心となって東京都協会を設立することとなった。当時、内藤のアパートに集まり検討を重ねる中、驚いた事に、内藤はワラバン紙を切り自力で機関紙「バーベル」を発行するなど、皆をリードし、色々な障害を乗り越えて、昭和25年に東京都協会創立に漕ぎつけた。

内藤義治は、東京都協会創立の第一の功労者である。

初代会長は桑原用二郎、理事長は飯田一郎、総務は内藤義治、理事は12～13名などであった。現在の理事で創立当初から就任しているのは、小山高栄、森一、関慶三郎の3名である。

創立以後

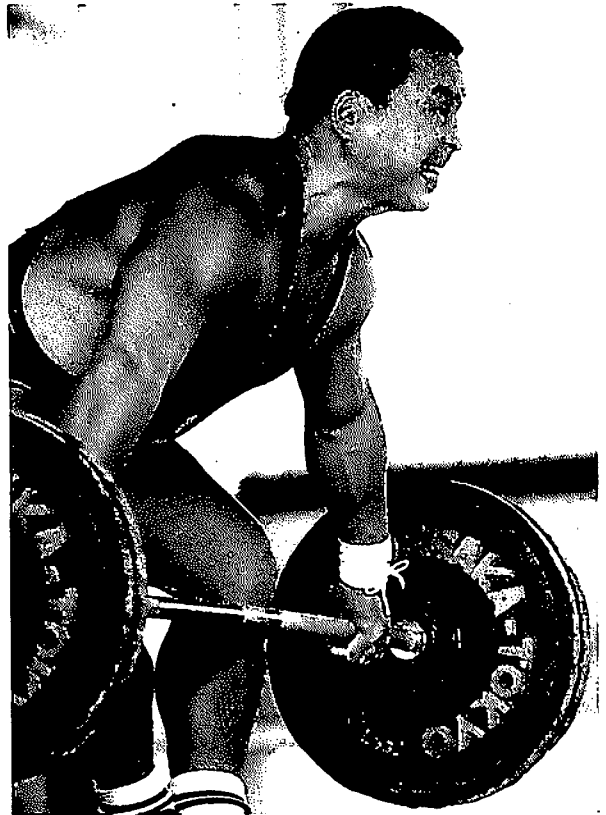
東京都協会は発足したが、競技人口が少なく大学にも重量挙げ部がなかったため、当時全国大会などで活躍していたのはYMCAで練習していた、内藤義治、照井進、原田繁信等5～6名の選手にすぎなかった。

昭和30年の東京都大会に、個人で練習していた大沼賢治がL級で初出場ながらPで日本タイ記録を出し、翌年のメルボルン・オリンピック大会に出場、第4位ではあるがオリンピック新記録を樹立した。語学の達者な彼は、トミー・コーノを翌年日本に招待して日本の一線級の選手と記録会を開催した。その年の静岡国体のJで155kgの世界記録を挙げたが、再検量で100グラム余りオーバーし、非公認になってしまった。

昭和33年の東京都大会に、当時は参加できなかった中学生の福田弘が出場、翌年城西高校一年生となり、学生チャンピオンの加藤順一を抑え東京国体に出場、また、昭和39年の東京オリンピック大会では4位入賞、同年の国体では、P126kg、T380kgの世界記録を樹立した。昭和41年のガネホ大会に出場したことで出場停止の処分を受け、8～9年の長期間出場できなくなり、本人だけでなく、日本重量挙げ界にとっても取り返しのつかない大変なマイナスとなった。

昭和45年東亜学園3年生の竹内雅朝が、高校生ながら日本ランキングに入り、順調に力をつけて、昭和51年のモントリオールでは4位入賞した。

昭和53年に城西高校に入学した並木良憲は、高校、大学共にチャンピオンに輝き、ジュニア世界選手権に3回連



東京(銅)・メキシコ(銀)オリンピックで活躍・大内仁

続出場、昭和63年のソウル・オリンピック大会にも出場を果たした。

城西高校教員の小林義幸は昭和34年、部創立以来、城西高校で大会を運営し、福田、並木の2名のオリンピック選手を初め多数の選手を育成し各大学に送り込み、その選手が高校の先生となって選手を育てることで、競技人口の少ない日本の重量挙げに貢献している。

また、東亜学園の竹内を育てた加藤仁は、埼玉栄高校を名門校に育て上げた。

昭和47年より東亜学園の顧問となった小野寺裕は、高校チャンピオン2名の他、多数の強い選手を育て、現在の強い東亜学園のイメージを作り上げた。

警視庁ウエイトリフティング部の前監督で、東京都協会理事長の大内仁は、福島県出身で法政大学時代に驚異的に

記録を伸ばし、東京オリンピック大会銅メダル、アジア大会3回連続金メダル、湯布院の日韓大会では、M級S145kgの世界記録を樹立した。当時のM級、LH級、MH級の日本記録を保持し、日本の重量級の第一人者であった。

法政大学卒業後、警視庁に入り、警視庁監督となり、東京の主力・牽引者的存在として活躍し現在に至っている。その後は、警視庁から、ミュンヘン・オリンピック52kg級4位の佐々木哲英、全日本選手権+110kg級5連覇達成の岩崎雄二、その他多くの優秀な選手を送り出してきた。

平成5年に松尾謙資が大内仁に代わって監督となり、現在活躍中の生方力、小黒直樹、安田英樹を中心として全日本選手権優勝を目指し頑張っている。

池上スポーツクラブの指導者である鈴木清(東京都副理事長)は、昭和45年以来長期にわたって大田区池上スポーツクラブを指導し、大田区民のウエイトリフティングの普及に貢献している。最近では、三瓶芳生(全日本選手権3位)や、大学選手権で活躍している選手も育成している。

全日本選手権優勝者(東京都登録者)

52kg級	遠藤滝軌	昭和22年
60kg級	井口幸男	" 21、22、23、24、25年
67.5kg級	大沼賢治	" 30、31、32、33、34、35、36年
75kg級	大内 仁	" 44、45、46、47、49年
100kg級	岩崎雄二	" 47、48、49、51年
52kg級	佐々木哲英	" 47年
60kg級	今井勇夫	" 56年
90kg級	松尾謙資	" 60、61、62年 平成3年

国民体育大会優勝者(東京都登録者)

52kg級	遠藤滝軌	昭和22、24年
60kg級	井口幸男	" 21、22、23、24、25年
67.5kg級	大沼賢治	" 30、32、33、34、35年
56kg級	西賀順好	" 31年
75kg級	鈴木邦夫	" 34年
82.5kg級	藤本秀喜	" 39年
90kg級	継岡正章	" 39年
56kg級	猪狩光正	" 43年
90kg級	大内 仁	" 44、45、48、49、50年
52kg級	竹内雅朝	" 48、49年
67.5kg級	小野祐策	" 49年

110kg級	岩崎雄二	" 52年
67.5kg級	佐藤光義	" 58年
90kg級	松尾謙資	" 58、62 平成元年

国体東京都団体成績

団体優勝	昭和24、34、48年
" 準優勝	" 25、31、36年
" 第3位	" 33、39、49、50年

全日本社会人選手権大会団体成績

団体優勝	警視庁
昭和48年	宮崎
" 52年	愛知
" 54年	栃木
" 56年	鳥根
" 59年	鳥取

全日本実業団選手権大会団体成績

団体優勝	ミナト興産
昭和48年	宮崎
" 49年	佐賀

役員組織

会 長	宮下武四郎	日本製紙株式会社社長
副会長	村松 忠義	(株)銀座村松社長
"	三瓶 絃正	本成院住職
理事長	大内 仁	警視庁教養課
副理事長	森 戦一	元東京地方検察庁
"	鈴木 清	
"	福田 弘	以下理事23名

一般選手で現在活躍している選手

警視庁	小黒直樹	99kg級	(平8年全国第3位)
"	安田英樹	108kg級	(平8年全国第3位)
"	生方 力	+108kg級	(平8年全国第5位)
池上スポーツクラブ	三瓶芳正	99kg級	(平7年全国第4位)
中大	鈴木基樹	54kg級	(平7年全国高校総体優勝)
中大	樋口志之	+108kg級	(平7年全国高校総体4位)

活動状況

①東京都民大会	5月上旬
②東京都高校総合体育大会	5月中旬
③東京都選手権大会	6月下旬
④夏季強化合宿	8月中旬
⑤高校新人戦	10月上旬
⑥東京都秋季大会	11月下旬

年間上記の大会を実施し、春は高校生の合同練習、夏から秋は、一般、大学、高校生を交えての夏季強化合宿等

を実施し競技力の向上を図っている。

これからの強化策

①底辺の拡大と選手の発掘

ウエイトリフティング競技は、筋力もさることながらテクニックも大変重要である。

優秀なコーチが指導し、練習環境が整っていないければ、強い選手を輩出することはできない。したがって底辺の拡大は、高校に頼らざるを得ないのが現状である。

しかしながら、東京都内にウエイトリフティング部のある高校は3校にすぎない。数多い競技人口の中から選手を発掘し、育てあげることがこれからの課題といえる。

②選手の指導と育成

一流選手を輩出するためには、一流のコーチが必要となる。ウエイトリフティングの知識に精通していることは勿論のこと、現在、全国指導者講習、都体協のコーチ学等を研究し、医学の知識も交えてより高度な指導が要求される。熱心な指導と、レベルの高い指導が選手を一層強くしていくものである。

③練習環境の充実

器具等の充実した広い練習場で強化練習や強化合宿ができれば、より選手の強化につながる。都協会に与えられた年会費、競技力向上費をこれらのために有効に活用し、更なる強化策に力を投じていきたい。

<高校関係について>

歴代部長

初代	小田 光治	(昭和34~36)
2代	猪股千代吉	(昭和37~39)
3代	谷村 順一	(昭和40~44)
4代	大野 良吉	(昭和45~55)
5代	新藤 宣夫	(昭和56~平成8)

歴代委員長

初代	大野 良吉	(昭和34~44)
2代	小林 義幸	(昭和45~平成7)
3代	小野寺 裕	(平成8~)

加盟校の変遷

昭和34	8校	昭和50	10校
昭和35	13校	昭和56	7校
昭和39	14校	昭和60	6校
昭和40	15校	昭和63	5校
昭和41	18校	平成4	6校
昭和43	16校	平成8	5校

(昭和31年~50年までの資料を、事務局城西大学附属城西高等学校体育館

火災で焼失したため、記録不足で不十分な点があります)

〈沿革〉

専門部設置以前(昭和30年～昭和34年)

都立第三商業定時制、都立京橋商業、海城、法政大学第一の4校にはバーベル等も無く、明治大学、法政大学、早稲田大学等々で練習をさせてもらっていた。その間に昭和32年第4回北海道大会で、都立第三商高校が全国高校選手権に於いて優勝、昭和34年第6回岡山県大会で、都立京橋商業高校が全国高校選手権において優勝をした。

専門部設置

昭和36年6月に全国高体連初代部長の井尾武雄先生をはじめ、副部長の野中乾(都立広尾)藤波昇(都立三商)久保克人(中大杉並)の各先生方の御尽力により都高体連に専門部として加盟を承認された。

初代部長は小田光治(都立京橋商業校長)、副部長野中乾(都立広尾)・大野良吉(都立京橋商)、常任委員藤波昇(都立三商)・小林義幸(城西)・斉野健一(早大工)・藤井真美(都立京橋商)の諸先生方の新役員で発足した

その頃の加盟校の先生方は練習用具、練習法等で苦勞したが、都協会理事長の飯田勝康、飯田定太郎、野中義治、小山高栄、関慶三郎、林輝児の各氏の御支援と御協力により、昭和35年の国体では新設の高校部で準優勝し、翌昭和36年はF級1位山本純一(三商)、B級2位谷合時雄(昭和鉄道)、Fe級1位福田弘(城西)、M級2位中村英征(法政一)、LH級1位三俣幸夫(京商)の3階級に優勝し、東京都総合優勝の大きな役割をはたした。

またその年ウィーンで行われた世界選手権大会に出場した福田弘(城西)がB級で6位に入賞し、東京はもとより世界の注目となった。

〈年次別概況〉

昭和32年

全国高校総体は、北海道札幌市で行われ、L級1位鈴木孝久(都三商)、LH級1位鈴木和己(海城)が活躍し、都立三商が総合優勝した。

昭和33年

全国高校総体(秋田県秋田市)、F級1位神谷昌宏(京北)が個人戦で健闘した。

昭和34年

全国高校総体(岡山県金光町)、F級1位福田弘(城西)、Fe級1位東条次朗(京橋商)、LH級1位吉田実(中大杉並)

の3人が個人戦で優勝した。

昭和35年

全国高校総体(富山県富山市)、B級福田弘(城西)が個人戦で優勝、好記録を出した。

昭和36年

全国高校総体(宮城県仙台市)、F級1位山本純一(三商)、Fe級1位福田弘(城西)、LH級1位三俣幸夫(京橋商)の3人が優勝、他にB級2位谷合時雄(昭和鉄道)、M級2位中村英征(法政一)の活躍があった。

昭和37年

全国高校総体(栃木県宇都宮市)、L級3位安田順亮(城西)が活躍し、次年に楽しみな2年生の多小田一紀が6位入賞し、期待をもたせてくれた。

昭和38年

全国高校総体(徳島県徳島市)、M級1位多少田一紀(法政一)、F級根本和年、L級鈴木が上位入賞し、団体戦準優勝で東京代表が4年ぶりに氣勢の上った年であった。

昭和40年

全国高校総体(大分県湯布院町)、MH級が新設された年で、同級1位久保秀俊(法政一)が記念の優勝を果たした。

昭和42年

全国高校総体(福井県坂井市)、L級3位堀口茂紀(城西)を中心に、F級安部仁、B級谷合敏行、B級羽住幸夫、LH級野口利雄等城西高校の活躍した年であった。この大会は民泊で、外出から帰るとそのたびにサイダー、スイカなどを出していただき、大変お世話になった。未だに忘れられない良い思い出多い大会である。

昭和45年

全国高校総体(和歌山県串本町)、F級1位竹内雅剛(東亜商業)を中心に東亜商業が団体戦4位に入賞した。

昭和49年

全国高校総体(福岡県北九州市)、F級2位秋和保男(東亜商)が入賞した。

昭和50年

全国高校総体(山梨県山梨市)、L級1位市川実(東亜商)。5年ぶりで東京代表が優勝した。

昭和52年

全国高校総体(岡山県高梁市)、この年から52kg級、56kg級、60kg級、67.5kg級、75kg級、82.5kg級、90kg級、と定められたが、入賞者なし。

昭和53年

全国高校総体(山形県鶴岡市)、60kg級5位新井亮(城西)、82.5kg級4位島袋隆之(城西)等の活躍で団体戦で城西6

位入賞。

昭和54年

全国高校総体(兵庫県明石市)、67.5kg級6位神原晃(城西)、82.5kg級2位島袋隆之(城西)の入賞。

昭和55年

全国高校総体(愛媛県新居浜市)、52kg級2位並木良憲(城西)、60kg級5位池田光晴(城西)、82.5kg級6位三上勲(城西)の頑張りで団体戦5位入賞。

昭和56年

全国高校総体(群馬県水上町)、52kg級4位山口稔(城西)、56kg級6位横田信人(城西)、75kg級1位西山正浩(城西)、82.5kg級3位秋元昭人(城西)などの活躍で、団体戦は2位となった。優勝校埼玉栄高と同点で、上位入賞の差でおしくも優勝できなかった。

昭和57年

全国高校総体(鹿児島県牧園町)、56kg級1位山口稔(城西)、60kg級3位細沼誠(城西)、75kg級今田知(城西)の活躍で、団体戦は4位に入賞。

昭和58年

全国高校総体(愛知県名古屋市)、67.5kg級2位松浦秀樹が入賞。

昭和60年

全国高校総体(石川県珠州市)、75kg級3位池田裕樹(城西)、82.5kg級3位池田信男(城西)、100kg級1位増田浩一(東亜学園)、東京代表3年振りの優勝者であった。

昭和61年

全国高校総体(山口県下関市)、67.5kg級5位大吉弘(城西)、82.5kg級3位川島信(東亜学園)、100kg級6位高塚政好(城西)、以上3人の入賞。

昭和62年

全国高校総体(北海道士別市)、52kg級4位戸田英一(城西)1人だけの入賞。

昭和63年

全国高校総体(兵庫県洲本市)、60kg級3位高橋信明(城西)、75kg級5位辻良太(東亜学園)、以上2人の入賞。

平成元年

全国高校総体(徳島県上板町)、56kg級4位早川英明(城西)、90kg級2位小黒直樹(東亜学園)、以上2人の入賞。

平成2年

全国高校総体(宮城県村田町)、67.5kg級三宅紀久(城西)1人の入賞。

平成4年

全国高校総体(宮崎県佐土原町)、60kg級4位保井俊一郎(高輪商業)1人の入賞。

平成7年

全国高校総体(鳥取県岩美町)、54kg級

1位鈴木基樹(東亜学園)、59kg級4位木村大介(東亜学園)、+99kg級4位樋口忠之(城西)の3人が入賞。10年ぶりの優勝者であった。

東京都 全国高校総体優勝者
昭和

32年 L 鈴木 孝久(都三商)
 " LH 鈴木 和己(海城)
 33年 F 神谷 昌宏(京北)
 34年 F 福田 弘(城西)
 " Fe 東条 次朗(都京橋商)
 " LH 吉田 実(中大杉並)
 35年 B 福田 弘(城西)
 36年 F 山本 純一(都三商)
 " Fe 福田 弘(城西)
 " LH 三俣 幸夫(都京橋商)
 38年 M 多小田一紀(法政一)
 40年 MH 久保 秀俊(法政一)
 45年 F 竹内 雅朝(東亜商)
 50年 L 市川 実(東亜商)
 56年 75 西山 正浩(城西大城西)
 57年 56 山口 稔(城西大城西)
 60年 100 増田 浩一(東亜学園)
 平成
 8年 54 鈴木 基樹(東亜学園)

今後の東京都の高校生部員の育成と部員集めを考えると大変な時代に直面している。先ず部員が集めににくくなってきたこと。また、全国的ではあるが生徒数が少なくなっていることなどを考えると、強い弱いとか上手下手とか



平成8年広島国体東京都チーム

言っている問題ではないようである。
 どうして部員を集めるか、いつまでクラブが続けられるか、本当に大変な時期になってきた。

関係者全員協力して頑張るしかないと思っている。

おわりに

日本ウエイトリフティング協会60周年史に掲載するにあたり、東京都協会の歴史、活動状況について記述しましたが、日本協会の益々の御発展を祈念

すると共に、その一翼を担う我が東京都協会も、先達の歴史を汚さぬようこれからも頑張っていく所存である。

〈現役員〉

会 長	宮下武四郎
副 会 長	三瓶 敏正 村松 忠義
理 事 長	大内 仁
理 事	福田 弘 鈴木 清 柳田 育孝 小林 義幸

神奈川県

事務局 千101 東京都千代田区鍛冶町2-5-9 森寶鉦業株内
森 優 TEL 03-3252-4928

沿革

協会創立までの経緯

戦前の神奈川のウエイトリフティング競技界は、石川達郎(法大OB)が学生時代に個人的にこの競技を続けていただけで、現在の神奈川の競技界の基礎は全て戦後に築かれたものであると言ってよい。

戦後間もなく、日本ウエイトリフティング界の大先輩である井口幸男(慶応高校教員)が学内で生徒を指導し、慶大教養部に在学中の足立節をはじめとする愛好者によるグループが組織されたのがきっかけとなり、学内において重量挙部として本格的な活動を始めるようになったのが、県下の競技界の大きな礎となった。

時を同じくして、新日本飛行機株において石川達郎が先頭となって勤務先の同僚の中から愛好者を募り、占領軍用の部隊体育館を借用して活動を始めていたが、このY・O・Dクラブと足立の後輩である八木沢進を中心とする慶應グループが協力し、中助松(横浜市選出衆議院議員)を初代会長とする神奈川県重量挙協会が設立されたのが、いまだ戦後の混乱が続く昭和25年のことであった。

大躍進・大活躍の黎明期

協会設立後さっそく、同年愛知県名古屋で開催された第5回国体に初の選手団を送り、Fe級で吉屋泰(法大)が5位入賞を果たした。

昭和26年の第6回国体(広島県三原市)には5名の選手を送り、F級の高田(慶大)を始め若手の入賞者を出して総合9位という成績を残した。

昭和27年、県協会はそれまでの多目的な組織を改めて正式に役員を定めることになる。すなわち2代目会長に、上野健(神奈川トヨタ自動車株式会社社長)、理事長には石川達郎が就任、その他の役員もそれぞれ定められ、本格的な歩みを進めることになるのだが、

石川理事長はまず、競技の一層の普及を図るべく、一般の会社や団体を回って競技のエキジビションを行ったり、法大重量挙部を引率して鎌倉で合宿、海浜デモンストレーションを行うなどして、県民の競技に対する理解と関心を呼び起こしていった。この年に神奈川県体育館で開催した第1回神奈川県選手権大会は、報道機関の協力でウエイトリフティングの名が初めて県民の目に触れることになった。また、横浜市で毎年開催している労働者レクリエーション大会にも、競技の公開を兼ねて選手を派遣し、労働者の間に競技への理解を深めるなど、競技の普及のための努力は並みはずれたものがあった。

こうした活動は同時に、選手の競技力向上にもつながることとなり、同年福島県平市で開催された第7回国体には、F級からLH級までフルメンバーを派遣、B級の三浦和男(慶大)が3位入賞を果たすなど、総合でも一躍6位という輝かしい成績を残し、神奈川の競技水準が全国レベルに達していることを証明した。

昭和28年には、愛媛県新居浜市で第8回国体が開催されたが、これを待たずして第2回神奈川県選手権大会において、B級の南部良雄(新日本飛行機ク)・Fe級の丸山晃平(法大)が県選手として初めて日本新記録を樹立する快挙を成し遂げた。国体では南部の優勝をはじめ総合成績3位、全日本選手権でも丸山の優勝の他、幾多の日本新記録が県選手によって更新された。こうして極めて短期間で、全国で長い歴史と実績を誇る福島・東京・徳島・愛媛などの強豪と比肩できるまでになった。また、この年に県立鎌ヶ丘高校体育主任樽井富雄によって、同校に重量挙部が創設され、以後多くの名選手を生み出す母体となった。

勢いに乗った県勢は、昭和29年には遂に国際試合に南部良雄を送り込み、マニラで開かれた第2回アジア大会で

歴代会長

- 初代 中 助松(昭和25年～)
- 第2代 上野 健(昭和27年～)
- 第3代 石河 京市(昭和32年～)
- 第4代 田島 吉三(昭和33年～)
- 第5代 橋本 正一(平成6年～)

B級3位入賞(P87.5、S97.5、J120、T305)という偉業を達成した。北海道小樽市で行われた第9回国体でも、優勝者こそなかったものの前年に引き続き総合3位に入り、翌年開催の神奈川国体にむけて弾みをつけた。また、この年から始まった全国高校選手権大会に、慶応高校から4名が出場し、L級石川雅康が3位に入った。

栄華を極めた昭和30年代

翌30年には、地元開催の国体を川崎市で開催したが、完全優勝を目指して強化を重ねた結果、B級南部、M級島田寿次、LH級窪田登、この回から新設されたMH級では石川雅康が見事に優勝し、何と7階級中4階級を制するという離れ業を演じ、2位を16点も引き離して総合成績初優勝を成し遂げた。

神奈川国体総合優勝の余勢を駆って参加した昭和31年の第11回国体(兵庫県尼崎市)では、M級島田が連続優勝を果たして総合2年連続優勝に貢献した。またこの年にメルボルンで開かれたオリンピック大会B級に参加した南部は見事に6位入賞を果たし、神奈川のウエイトリフティング史に輝かしい1ページを記した。第3回を迎えた全国高校選手権には6名の慶応高校生が参加。F級の山田隆が優勝、M級の神森信之がJで日本高校新記録を樹立して2位に入るなど、団体準優勝の大きな原動力となった。一方、この年より始まった全関東選手権(東京)には、高校の部に4名、一般の部に5名の選手を送り込み、全員入賞という快挙を成し遂げた。

翌32年静岡県清水市開催の第12回国体でもB級南部、LH級窪田が優勝し、3年連続は逸したものの総合で2位に入り、神奈川健在をアピールした。第4回全国高校選手権F級では山田(慶応高校)が連続優勝を達成した。またこの年第2回全関東選手権大会を川崎市体育館で開催したが、これを契機に新会長に石河京市(横浜市長)が就任し、

不二サッシ・慶大クラブを中心とする新執行部が組織された。

国体2年連続優勝を果たすなど隆盛を極めた神奈川も、その後の急速な経済成長とあいまって国民の目が外見華やかで興味のわきやすい球技型スポーツに移行していったことなどから、緩やかながらも下降線を描き始めることになる。この年昭和33年に、当時横浜市連合青年会会長だった田島吉三が第4代目会長に就任。田島新会長はそれまで流動的な大学生選手に頼っていた現状を打破すべく、地元高校生選手の発掘育成に着手。慶応高校・緑ヶ丘高校以外の高校にも重量挙げを普及させるため勢力的な活動を続けていくが、これが昭和38年の県高体連ウエイトリフティング専門部設置の大きな基礎となっていた。この年の全国高校選手権には、緑ヶ丘高校・横浜商工高校が初めて選手を送った。また、第3回全関東選手権に8名が出場し、団体優勝を飾った。一方、昭和30年から、総合1位・1位・2位と快進撃を続けていた国体も、この年は窪田がLH級で2年連続優勝を果たしたものの、総合では6位にとどまった。

昭和34年には、第4回全関東選手権を横浜市老松中学校体育館で開催。前年総合6位転落の憂き目を見、再浮上を期しての参加となった第14回国体では、窪田がLH級で3年連続優勝を遂げるなどして総合4位に入る意地を見せた。また、協会発足10年を迎えたこの年には、人事一新を図るべく若手を起用、理事長に南部良雄を抜擢した。

昭和35年から全国高校選手権は、全国高体連ウエイトリフティング部会の主管となるが、神奈川からは慶応高校より6名が参加した。熊本県宇土市で開催された第15回国体は、阿部譲がMH級で初優勝を遂げ、総合でも前年に引き続き4位を確保した。

昭和36年、第16回国体(秋田県昭和町)に参加した山田隆は、F級の日本新記録272.5kgを樹立したが、同記録体重差で第3位にとどまり、総合でも入賞を逃すなど昭和27年以来9年間続いていた6位以内入賞の記録が途絶えた。この年の全日本学生選手権F級で山田はT282.5kgの日本新記録をマークし、この大会3連覇を達成した。

昭和38年、南部理事長が、翌年開催される東京オリンピックの強化コーチに就任、理事長の補佐として土屋事務局長が副理事長に推薦された。山口県下関市で開催された第18回国体では、

高校の部関東地区予選にて本県勢が初めて出場権を獲得したが、本大会の得点に結びつくまでには至らなかった。一般の部では、L級の桂川孝三(県体協)とH級阿部譲(リッカーマシン)が優勝し、総合でも前年より1ランクアップの3位入賞を果たした。しかしながら、この年を境に国体の優勝者が神奈川から姿を消すことになった。そればかりか総合の入賞も以後完全に途絶え、永年トップレベルを維持してきた神奈川のウエイトリフティング界にも暗雲が漂い始めてくる。また同年から始まった全日本社会人選手権(東京)M級で桂川、MH級で阿部が優勝した。この年になり、日大高校体育主任猿谷九龍と、横浜緑ヶ丘高校体育主任樽井富雄の尽力によって、県高体連にウエイトリフティング専門部が設置された。初代部長には横浜緑ヶ丘高校長二宮竜雄が就任した。同年9月にはプレオリンピックを藤沢秩父宮体育館で開催、国際親善の実を挙げた。この年の12月に第1回県新人大会を開催した。

昭和39年、オリンピック一色のこの年は、オリンピック大会競技役員として田島会長が、強化コーチとして南部理事長が活躍。L級桂川孝三が代表候補選手に指定されはしたものの、惜しくも代表の座を逃した。

低迷期に入った昭和40年代

東京オリンピックはこの競技の人口を飛躍的に増加させ、昭和40年の県内登録選手は290名を数えるまでになった。必然的に県協会主催競技会に参加する選手数も増加し、朝8時競技開始・夜11時30分試合終了という強行日程を余儀なくされたり、同一大会を2日間に渡って開催するなど大盛況であった。同年秋田県大館市で開催された第2回全日本社会人選手権のL級で松本健一(不二サッシ)が初優勝を飾った。

昭和41年、横浜バーベルクラブの代表桂川孝三は、不二サッシ・入江クラブ・東芝・日立などに呼びかけ、全国にさきがけて県社会人連盟を発足させたが、これを契機に前年から開催されるようになっていた県社会人選手権大会を主管するようになった。この年の第13回全国高校総体には、慶應・緑ヶ丘・港・関東学院から4名が参加した。

昭和42年6月、第4回全日本社会人選手権大会を、川崎市民会館に於て3日間にわたって開催した。一ノ関・木村・大内などのオリンピック選手を始め大会史上最多の選手が全国から参加し、県内選手の技術向上と競技の普及

に大きく貢献した。前年の同大会で団体2位に入り注目された不二サッシチームは大会準備の疲れからか振るわず、3名の入賞者を出したにとどまった。この大会は年々派手になる大会に歯止めをかけるべく全て手作りで行われ、経費の節減という面では以後の大会運営の範となった。また入賞選手に授与された表彰状は日本協会野中副理事長と緑ヶ丘高校市川教諭によって全て手書きされたものであり、入賞した選手たちの感激もひとしおであった。東京オリンピックに全力を傾注した南部理事長は後進に道を譲るべく、この大会を機に競技と協会運営の両面から手をひくことになり、県協会は新しい局面を迎えることになった。

昭和43年、南部理事長の後任として全国高体連ウエイトリフティング専門部事務局長平川義美(日大高校教諭)が推薦された。また県高体連第2代専門部長上島一夫(緑ヶ丘高校長・40年部長就任)に代わり、金子英二(緑ヶ丘高校長)が部長に就任した。一方、日本協会・県体協の法人化の動きも活発になり、田島会長や平川理事長がその推進者として活躍した。

昭和45年、第17回全国高校総体MH級で甲田肇(日大高校)が2位に入賞、さらに同年11月の関東高校大会MH級で、347.5kgの日本高校新記録を樹立し優勝した。またこの年に、後に会長に就任することになる橋本正一が副会長に推薦された。同年の全日本社会人選手権大会では不二サッシが2年連続団体準優勝を果たした。一方、県高体連第4代専門部長に中村隆市(緑ヶ丘高校長)が就任した。

昭和46年、オリンピック金メダリスト三宅義信氏らを迎え第16回全関東選手権を緑ヶ丘高校体育館で開催した。この年、横田慶一(慶応大学)が第17回全日本大学対抗H級で2位、第17回全日本学生選手権H級で3位に入る活躍を見せた。また同年の9月に、昭和43年に開所していた県立体育センターにウエイトリフティング場が新設され、そのオープンセレモニーに多くの県内選手が参加した。ほとんどの県内大会は以後ここで行われるようになる。

昭和47年、第18回全日本大学対抗H級、第18回全日本学生選手権H級を岡本実(法政大学)が制覇、一人気を吐いた。この年に、第1回全神奈川対法政大学対抗戦が行われたが、この大会は学連との競技日程が調整できず2年続いただけで終わった。

昭和48年、学生界では敵なしにまで成長した岡本実(法政大学)は、全日本学生、全日本大学対抗両大会で2年連続優勝を果たした。また緑ヶ丘高校体育館改築工事に伴って同所での大会開催ができなくなったため、この年より県選手権を県立体育センターで開催するようになった。

昭和49年、佐賀県有田市で行われた第11回全日本社会人選手権実業団団体の部で日立戸塚が3位入賞を成し上げた。

低迷続く昭和50年代

昭和50年、数年来の低レベルで団体での入賞のなかった少年の部に、L級神部茂(法政二高)、M級藤井規之(日大高校)と2人の入賞者が出たが、成年の部に入賞者がなく、総合成績は相変わらず振るわなかった。この年に第8回関東高校競技大会を県立体育センターで開催した。また同年、国際コーチクリニックを同所で開催した。昭和48年に緑ヶ丘高校体育館改修のため中断され、昭和49年から協会理事米田迪の在任校である日下小学校体育館で再開されていた横浜市民大会は、この年から全県内選手を対象とした横浜競技会を兼ねて同校で開催されるようになった。昭和33年に会長就任以来協会発展に大いに貢献してきた田島会長が神奈川県体育功労賞を受賞したのもこの年である。この年の初めより、米田迪が協会の事務処理に携わるようになり、協会事務局は土屋事務局長と2人体制となった。

昭和51年にはモントリオール・オリンピック予選を兼ねた第36回全日本選手権大会を県立体育センターで、日中友好競技大会を平沼記念体育館で、第13回全日本社会人選手権大会を横浜商業高校体育館で開催した。全日本社会人では40歳のH級森俊(森寅鋼業)の5位入賞を始め6選手が入賞を果たし、社会人団体の部で横浜パールクラブが4位に入った。県高体連専門部では河原昌治(平沼高校教頭)が第5代部長に就任した。

昭和53年、この年の県選手権52kg級で小野勲(東京たばこサービス)が2度目の優勝を飾ったが、この優勝が同選手と同級13年連続優勝という大偉業のスタートとなった。また小島一男(緑ヶ丘高校教頭)が第6代県高体連専門部長に推薦された。

昭和55年、第24回関東選手権大会を普及を兼ねて三浦市体育館で開催。このころより大卒有力選手の県内への就



昭和51年、第36回全日本選手権大会(県立体育センター)

職が目立ちはじめ、県勢の力となってきた。この年より国体選手激励を兼ねて理事長杯争奪大会を始めた。

昭和56年、第36回国体(滋賀県安曇川町)110kg級で軽部剛(目黒高校教員)が、S127.5・J167.5・T295で3位入賞、少年では岡松孝公(法政二高)が67.5kg級で7位となり同種別では6年振りの入賞を果たした。同年の第9回全日本実業団選手権(島根県出雲市)では早大OBの平原孝二(九久製作所)が100kg級で初優勝を成し上げた。記録は、S130・J165・T295kg。昭和49年以降、日下小学校体育館で開催してきた横浜競技会も、米田迪の転任に伴い、この年の開催が最後となった。

昭和57年、第10回全日本実業団選手権(群馬県水上町)100kg級で平原が2年連続優勝を達成した。またこの年の9月12日、県協会創立30周年記念祝賀会を、日本協会・県体協関係各位多数出席の下、横浜駅東口スカイビル・スエヒロで開催した。席上、永年協会の発展に尽くした次の諸氏に感謝状を送った。中村憲(長年副会長として貢献)・伊東政賜(初代社会人連盟会長)・南部良雄(優秀選手及び長年理事長として貢献)・猿谷九龍(県高体連にウエイトリフティング専門部を組織)・桂川孝三(優秀選手及び県社会人連盟を組織)・鳥島公雄(創立以来の選手としてまた選手育成者として=褒賞状授与)。

昭和58年、第11回全日本実業団選手権90kg級に出場した平原はこのクラス初制覇。100kg級2連勝と合わせこの大会3年連続優勝を成し上げた。この年に関東高校大会を県立体育センター

で開催した。

昭和59年、ロサンゼルス・オリンピック予選を兼ねた第44回全日本選手権で軽部が2位入賞を果たした。勢いに乗った軽部は同年の奈良国体110kg級でも2位、さらに11月に島根県岩美町で行われた第21回全日本社会人選手権では110kg級で初優勝を飾り、神奈川に軽部ありとその存在をより大きなものにした。またこの年第32回を迎えた県選手権に、米田迪の在任校である日限山中学校と関東学院中から11名の中学生が参加。54kg級・58kg級・64kg級などを特設して優勝のチャンスを増やしたこともあって、競技歴数ヶ月ながらも自己記録を更新するなどはつらつとしたプレーを展開し、関係者の注目を集めた。この中学生初参加は翌日の神奈川新聞が「世界に負けるな」と大見出しをつけてスポーツ欄のトップに掲載、ウエイトリフティングは高校生になってからが適当という根強い考え方に一石を投じた形になった。

黄金時代の再現を目指して

昭和60年、第22回全日本社会人選手権(山梨県御坂町)+110kg級で軽部が初優勝。前年の110kg級優勝に続いて2年連続優勝を飾った。同時開催の第13回全日本実業団選手権では、加納修(フジタ工業)が75kg級で、後藤貴徳(NASスイムスクール厚木)が90kg級で初優勝を果たした。またこの年に、平川理事長が、昭和50年の田島会長以来、神奈川県体育功労賞を受賞した。一方、県高体連専門部では、第7代部長三上敏雄(岡津高校長・54年部長就任)に代わり、三枝忠一(田奈高校長)

神奈川県ウエイトリフティング協会

創立30周年記念祝賀会



県協会30周年祝賀会であいさつする西川正一氏

が第8代部長に就任した。

昭和61年3月、第1回全国高校選抜大会を県立体育センターで開催、鈴木宏則(日大高校)が52kg級で7位に入った。第41回国体(山梨県御坂町)の+110kg級で軽部は3位入賞、さらに軽部は第32回全日本社会人選手権(沖縄県国頭村)+110kg級で2連覇を飾り、110kg級と合わせ3年連続優勝を達成した。

昭和62年、前橋市で開かれた第47回全日本選手権+110kg級で軽部剛がT312.5kg(S.130、J.182.5=大会新)で堂々の初優勝。本県勢の全日本制覇は昭和37年の桂川以来で、実に25年ぶりの快挙となった。今や日本の第一人者となった軽部は、第24回全日本社会人選手権(京都府岩滝町)+110kg級で3連勝、110kg級と合わせてこの大会4年連続優勝を達成した。この年に少年の部で活躍したのが中学時代からこの競技に親しんできた広瀬勲(日大高校)。第34回全国高校総体(北海道士別市)67.5kg級でT230(S100、J130)で4位に入り、本県勢としては昭和45年以来17年ぶりの同大会の入賞を記録したほか、同年の沖縄国体でも同級で本県少年勢で6年ぶりの入賞を成し遂げるなど大いに期待されたが、好素質を持ちながらも高校で競技生活を終えたのは惜まれる。またこの年の2月15日にウエイトリフティング場が設置された横浜磯子スポーツセンターがオープン。過去数年県立体育センターで開催していた横浜競技会は以後、同所で行うようになった。

昭和63年、第48回全日本選手権(埼玉県上尾市)+110kg級に出場した前年

度覇者軽部は、若手の追撃を振り切りT315kgで全日本2連覇の偉業を達成した。また同年9月の第16回全日本実業団選手権(北海道士別市)の82.5kg級に出場した加納修がT285kgで優勝した。この年から種目別表彰となった第43回国体(京都府岩滝町)82.5kg級Jで加納が4位、+110kg級軽部はS5位・J4位に入った。一方、県高体連専門部では、市川次男が第9代部長に推薦された。同年8月第32回関東選手権を磯子スポーツセンターで開催した。

平成元年、第49回全日本選手権(埼玉県上尾市)82.5kg級で加納修がT285kgで4位入賞。+110kg級2連覇を果たしている軽部は、この大会三連覇を狙って110kg級に出場したが、膝の故障が影響してT307.5kgで4位に終わった。第3回を迎えた全国中学生選手権(山形県羽根町)68kg級に出場した協会理事村上邦夫の子息村上康久(浦島丘中)は見事に初優勝を成し遂げ、前途に明るい希望をもたらした。同年の第44回国体(北海道士別市)では、82.5kg級に出場した加納がJで3位入賞を果たした。さらに加納は第17回全日本実業団選手権(福岡県津屋崎町)82.5kg級でもT295kgで2年連続優勝を成し遂げた。また100kg級の後藤貴徳(レッツスポーツ)もT280kgでこのクラス初優勝をマークしたほか、出場者全員が入賞を果たした。同時開催の第7回全日本マスターズ選手権の82.5kg級に出場した葦田雄一(太陽機械製作所)は、T240kgで初Vを果たした。

平成2年3月19日、第53回国体神奈川県準備委員会第3回総会において、

各競技の会場地が決まり、ウエイトリフティング競技は真鶴町で行われることになった。同年の第45回国体(福岡県津屋崎町)82.5kg級に出場した加納修は、得意のJで172.5kgを挙げ2位入賞を果たした。110kg級後藤貴徳もS5位、J6位に入った。膝の故障が完治せず記録の低下が目立ってきた+110kg級軽部は、前年のJ8位に続いてこの年もS8位に入るにとどまった。石川県珠州市で行われた第18回全日本実業団選手権90kg級に出場した加納修は、T285kgでこのクラス初V、75kg級・82.5kg級の優勝と合わせ、この大会4度目の優勝を飾った。第8回全日本マスターズ選手権(同所)82.5kg級の葦田雄一は、T240kgで2年連続優勝を達成した。

平成3年6月21日に第53回国体真鶴町準備委員会が設立され、以後施設専門部会を中心とする準備活動が始まることになった。第46回国体(石川県珠州市)82.5kg級で加納がJ第3位、+110kg級でも軽部が踏ん張りS6位、Jで8位に入った。入賞が期待された少年の部90kg級村上康久(寛政高校2年)は、Jで135kgを挙げたものの体重差で入賞を逸した。

平成4年3月、第7回全国高校選抜大会に出場した村上康久は、T235kgで4位入賞を果たした。同年6月の第47回全日本選手権(千葉市)に出場した82.5kg級加納は、Jで172.5kgに成功し、J日本一の座についた。同年の第47回国体82.5kg級でも加納は、J170kgで4位入賞(Sは7位)、52kg級高橋正智(農業者年金基金)も、S7位・J8位と健闘した。また第20回全日本実業団選手権(徳島県藍住町)82.5kg級で加納がこのクラス3回目の優勝、大会通算5度目の優勝を達成した。また、昭和43年以来協会の理事長として活躍してきた平川義美が病気のため退任、後任として森優が推挙された。11月26日には国体会場の中央競技団体正規視察が行われ、日本協会から野牧一雄氏が視察に來られた。一方、県高体連専門部第10代部長に佐藤誠治(練ヶ丘高校長)が就任した。

平成5年7月6日、第53回国体の神奈川県開催が内定した。この年、昭和33年以来県協会会長として会の発展に尽くした田島吉三が病気のため退任、橋本正一副会長が会長代行を勤めることになった。また県高体連専門部第11代部長には、佐藤誠治に代わり明石一雄(大岡高校長)が就任した。11月に愛

知県瀬戸市で行われた第11回全日本マスターズ選手権では、64kg級に出場した大高正夫(東京宏栄)が初優勝を成し遂げた。同所第21回全日本実業団選手権83kg級では、加納が通算6度目の優勝を飾った。

平成6年1月、第9回関東高校選抜大会を磯子スポーツセンターで開催した。4月には第53回国体の会場地真鶴町に国体準備室が設置された。この年のふくしま国体記念杯女子競技大会50kg級に出場した長谷川倫子(慶大職員)は、T152.5kgで初優勝を成し遂げた。また第12回全日本マスターズ選手権83kg級で、昨年一昨年と2位に甘んじていた藪田雄一が奮起、T242.5kgで階級変更後初の優勝を飾った。第22回全日本実業団選手権54kg級では、新田勝久(内野商事)が、70kg級で水上崇(ニコー)が初優勝を果たした。この年に第5代会長に就任した橋本会長が、協会では3人目の神奈川県体育功労賞を

受賞した。

平成7年、第55回全日本選手権70kg級で水上崇が2位入賞。第50回国体(福島県いわき市)でも水上は同級Sで3位、Jで5位と健闘した。83kg級津金(太陽機械製作所)もS6位、J8位入賞を果たした。この年北京で開催されたアジア選手権50kg級に日本代表として参加した長谷川倫子は、S.67.5、J.87.5、T155で7位となった。

また第23回全日本実業団選手権70kg級で水上が2年連続優勝、全日本マスターズ選手権83kg級でも藪田雄一が連勝しマスターズ通算V4を達成した。この年の7月11日「かながわ・ゆめ国体」の開催が正式決定された。8月8日には、真鶴町国体準備委員会が実行委員会に改組された。10月4日成年の部会場となる真鶴町立体育館の落成式典が行われ、橋本会長以下4人が来賓として出席した。

〈現役員〉

会 長	橋本 正一		
副会長	平川 義美		
理事長	森 優		
副理事長	福田 寅幸	米田 迪	
	村上 邦夫		
理 事	保井 一彦	郷 芳夫	
	後藤 直樹	岩渕 忠英	
	藪田 雄一	松永 実	
	瀬高 襄	大頭 徳樹	
	平原 孝二	藤原 謙平	
	辻田 豊	加納 修	
	遠藤 輝彦	本田 英昭	
	軽部 剛	横田 尚之	
	今井 利男	小俣 彰良	
	津金 修	藤本 幹人	
	宮村 淳	佐久 協	
	岡野 忠雄		
監 事	狼谷 九龍	小林 政夫	



山梨県

事務局 〒406 山梨県東八代郡石和町上平井25-6
松下 忠光 TEL 0552-23-1463

歴代会長

- 初代 小沢 敏雄 (昭和40年～)
- 第2代 中村 太郎 (昭和42年～)
- 第3代 村田 一郎 (平成6年～)

沿革

日本ウエイトリフティング協会発足60周年にあたり、競技の発展に御尽力された関係各位に深く感謝し、当支部協会の沿革を以下に記したい。

山梨県ウエイトリフティング協会は昭和40年5月14日に発足し、現在に至っている。振り返れば当協会が現在あるのも、東京五輪華やかなりし39年の新潟国体において、村田一郎、古屋真喜の師弟が再会したことに始まる。

日川高校時代、村田一郎に柔道・相撲をたたき込まれた古屋真喜が、一度は就職後、一念発起し法政大学に進学するやウエイトリフティング競技に没頭し、著しい上達の末、他県の代表として国体に出場していたのだ。総合開会式で再会した古屋は剛毅名高い村田に本県協会の設立を懇願し、意気を感じた同氏の尽力により翌年協会設立となった。

しかし、全くゼロからのスタート。手作り練習場から器具の調達、選手集めと村田・古屋の悪戦苦闘の日々は続き、帰省後の古屋は私事を省みず自らも選手として率先して範を垂れた。

村田の少数精鋭主義の精神は、古屋の強い指導と相まって、土屋義仁を筆頭に教え子が大学卒業後、後輩の指導にあたり、着実な競技力の向上につながっていった。そして20年の歳月を経た昭和60年、鳥取国体において遂に全国の頂点に立つことができた。また63年には日川高校が全国高校総体初制覇、現在まで国体3度・全国高校総体3度の団体制覇の栄誉に恵まれている。

以上、草創期の精神を後輩たちが引き継ぎつつ、今後も発展に努力し日本のウエイトリフティングに寄与できればと考える次第である。

年次別概況

昭和40年度

協会設立直後、第9回全関東選手権

(栃木県宇都宮市)に成年1名、少年4名が出場。初出場にもかかわらず総合3位に食い込んだ。

特に協会設立の仕掛人、古屋真喜(法大)はB級に出場しP95.0、S95.0、J117.5、T307.5の大会新記録で優勝し、指導者自ら少年勢の手本となった。また現理事長の土屋義仁(日川)も少年の部に出場し4位に入賞した。

昭和42年度

県議会議長であった中村太郎(後に労働大臣)を新会長に迎え、競技用具一式を寄贈していただいた。資金も役員も乏しいできたの当協会にとって誠にありがたい配慮であった。

昭和43年度

協会設立3年目にして第1期黄金時代の到来である。第12回全関東選手権(群馬県藤岡市)において成年・少年勢の力が結集し、遂に念願の総合優勝を勝ち得ることができた。

個人優勝者は次の通り。

- 少年B級 近藤 紀夫(日川)
- ” Fe級 成島 強(日川)
- ” M級 西島 隆(日川)
- 成年B級 古屋 真喜(自営)

一方、全国高校総体においても、西島隆(日川)が県勢初の3位入賞を果たし、団体でも日川高校が7位入賞と意気をはいた。

また、全関東優勝によりブロック代表として初の国体出場を果たした。特に少年の西島隆は選手団旗手として、“山梨県重量挙げここに有り”を印象づけた。

昭和44年度

第2回関東高校大会、第13回全関東選手権と2つのブロック規模の大会を本県日川高校体育館で開催した。

関東高校大会では、日川・明誠・第一商業の精鋭が健闘し、続く関東選手権には少年B級で田草茂(第一商業)が優勝し、成年B級の古屋真喜に続いた。また、全日本大学対抗戦においてはM級土屋義仁(法大)が本県出身初の大学チ

ャンピオンに輝いた。

昭和45年度

全国高校総体において、MH級松垣英治(明誠)がP110.0、S100.0、J130.0、T340.0で県勢初の全国個人優勝を果たした。

昭和46年度

第14回全日本社会人選手権(於明誠)という全国規模の大会を初めて県内で開催した。少数精鋭の役員構成ながら、役員兼選手としてB級古屋真喜(自営)、L級土屋義仁(勤労青年センター)が堂々3位に入る健闘を見せた。関東高校大会においてB級飯島真(日川)の優勝を筆頭に日川勢が健闘し、団体準優勝に入る健闘を見せた。

また、全日本学生選手権では日川出身のB級赤尾豊繁(法大)がP105.0、S95.0、J130.0、T335.0で兄弟県出身大学勢で2人目のチャンピオンとなった。

昭和47年度

全国高校総体において、MH級窪田忠彦(明誠)がで県勢2人目の全国個人優勝を果たした。

昭和48年度

全国高校総体では、MH級剣持司郎(明誠)が2位に入った。

昭和50年度

この年は、全国高等学校総合体育大会というビッグイベントを日川高校で開催した。村田理事長の強い指導力のもと法政大学の協力も得て、関係各位の並々ならぬ御努力の結果、協会創立10年目にして第2期黄金時代を迎えた。また10年後の「かいじ国体」を控えたこの頃から協会が活況を呈してくる。

関東高校大会では、日川高校が団体初制覇、また全国高校総体ではB級武井多加志(日川)とMH級坂本仁(明誠)の2年生コンビがそろって2位の健闘を見せた。

成年勢では、宮城県より移籍したM級菊地隆が全日本社会人選手権で2位に入り意気を挙げた。

昭和51年度

前年に続き、関東高校大会で日川高校が2連覇。続く全国高校総体ではFe級武井多加志(日川)とLH級坂本仁(明誠)がそろって優勝。余勢を駆って佐賀国体では総合4位と過去最高の成績を残す事ができた。

坂本仁(明誠)は、MH級の日本高校記録を2度の県内大会で更新しJ152.5kgを残した。

昭和52年度

第21回関東選手権を日川高校で開催した。

昭和53年度

日川高校出身の西島一の尽力により、初の単独海外遠征が実現した。山梨県高校選抜フィリピン遠征親善大会(於マニラ市)へ、村田一郎団長以下役員選手26名が参加しマルコス杯を獲得することができた。

また全国高校総体では90kg級小宮山哲雄(明誠)が2位に入る活躍を見せた。

昭和54年度

宮崎国体で52kg級小沼厚志(明誠)が2位に入り、全日本大学対抗戦では67.5kg級武井多加志(法大)、90kg級坂本仁がそろって優勝した。

また、パンノニア国際大会(於ハンガリー)へは村田理事長が日本選手団団長として精鋭を引き連れ参加した。

昭和55年度

この年は県内から3名の選手が日本代表として以下の大会に出場し健闘した。ブルースォード国際大会(於東ドイツ)

75kg級	岡田 隆	6位
日中友好大会(於中国)		
90kg級	坂本 仁	2位
日韓親善大会(於韓国)		
75kg級	武井多加志	優勝
100kg級	坂本 仁	2位

また、全国高校総体では100kg級生方が2位に入り、栃木国体では成年67.5kg級武井多加志、90kg級坂本仁が1位・2位と健闘した。

昭和56年度

第41回全日本選手権で75kg級武井多加志(公園管理事務所)が県勢初の優勝を果たし、その他の国際大会でも活躍した。

かいじ国体の御坂町開催が決定し、県初の中学生ウエイトリフティングスクールも開始され、これ以降競技人口が増加してくる。

昭和57年度

75kg級武井多加志(公園管理事務所)が、全日本選手権で2連覇。パンノニア国際大会・世界選手権大会・アジア大

会に出場。100kg級小宮山哲雄(日大)は日韓親善大会・日中学生交流大会で活躍し全日本選手権でも2位に入った。また村田理事長の指示により深沢桂一郎の尽力で谷村工業高校にウエイトリフティング部が創設され多数の選手が誕生した。

昭和58年度

群馬国体において成年67.5kg級武井多加志(日川高教)・小宮山哲雄(公園管理事務所)が共にS競技において日本新記録を樹立。成年勢の競技レベルが国内トップの域に達してきた。

昭和59年度

全国高校総体(於秋田)では75kg級渡辺浩幸の2位を筆頭に日川勢が活躍し、県勢初の団体総合3位入賞を成し遂げた。メンバーは次の通り。

56kg級	渡辺英明	60kg級	藤原栄一
67.5kg級	武井真三	75kg級	渡辺浩幸

全日本社会人選手権には、新設した「かいじクラブ」のメンバーで臨み、新加入の90kg級島袋隆之(谷村高教)の優勝などで4位に食い込んだ。海外へは75kg級武井多加志(日川高教)がアジア選手権へ、小宮山哲雄(日川高教)が日中友好大会へ遠征した。

昭和60年度

協会発足20年目のこの年、鳥取国体において遂に念願の国体総合優勝を達成する事ができた。村田一郎成年監督・土居義仁少年監督率いた7名の選手、また陰になり御尽力いただいた各位の総力により勝ち得た天皇杯のブロンズ像であった。表彰式の村田監督の潤んだ目が印象的であった。

特に少年52kg級渡辺博(谷村工高)のJの日本高校記録と成年100kg級小宮山哲雄(日川高教)の初優勝、新加入の110kg級松下忠光(東八振興事務所)の優勝が目立った。メンバーは次の通り。

少年	52kg級	渡辺 博(谷村工)
	56kg級	渡辺 英明(日川)
	82.5kg級	佐藤 英一(明誠)
成年	75kg級	武井多加志(日川高教)
	100kg級	小宮山哲雄(日川高教)
	110kg級	松下 忠光(東八振興事務所)
	+110kg級	生方 力(日大)

全国高校総体では52kg級渡辺博(谷村工)が優勝。

第29回関東選手権は少年・成年あわせて9名の優勝者を出し圧倒的強さで総合優勝を飾った。

また、かいじ国体のリハーサル大会として御坂町で第22回全日本社会人大会を開催し優勝者2名を出し総合でも4

位に入った。

海外へは100kg級小宮山哲雄(日川高教)が世界選手権初出場、52kg級渡辺博(谷村工)が日韓ユース大会へ出場した。

昭和61年度

本県初の国民体育大会「かいじ国体」が御坂町を会場に開催した。半世紀に一度の大会とあって、村田理事長を中心に県・町をはじめ関係各位の並々ならぬ努力の結果、盛会のうちに終了することができた。何年も前から準備にあたられた諸兄に深く感謝したい。

大会は前年に続き、総合優勝をねらったが惜しくも3位に終わった。しかし110kg級松下忠光(東八振興事務所)J日本新記録での連覇や75kg級小泉秀一(日川)・83kg級古屋洋明(日川)の2年生コンビの活躍が光った。この「かいじ国体」に向けた競技力の強化があったればこそ、本県の現在の競技力があることを痛感する。

全国高校総体では谷村工高がよく健闘し団体で3位に入賞した。また67.5kg級磯村賢一(日川)はS112.5、J135、T247.5で見事個人優勝し、後の県秋季大会においては、長年破られなかった67.5kg級のスナッチ日本高校記録を見事更新する118.5kgを挙げトータルでも262.5kgの日本高校新となった。一方大学勢は全日本大学対抗戦において2年生ながら75kg級渡辺浩幸(法大)が優勝し、ジュニア世界選手権(於ドイツ)にも出場した。

成年勢は全日本選手権において、110kg級松下忠光(東八振興事務所)が優勝し、アジア大会(於ソウル)に出場。4位に入る健闘を見せた。また全日本社会人大会では100kg級小宮山哲雄(日川高教)がスナッチで158.5kgの日本新記録を樹立した。

昭和62年度

〈関東高校大会〉(於日川高校)

団体 優勝 日川高校
4位 谷村工業高校

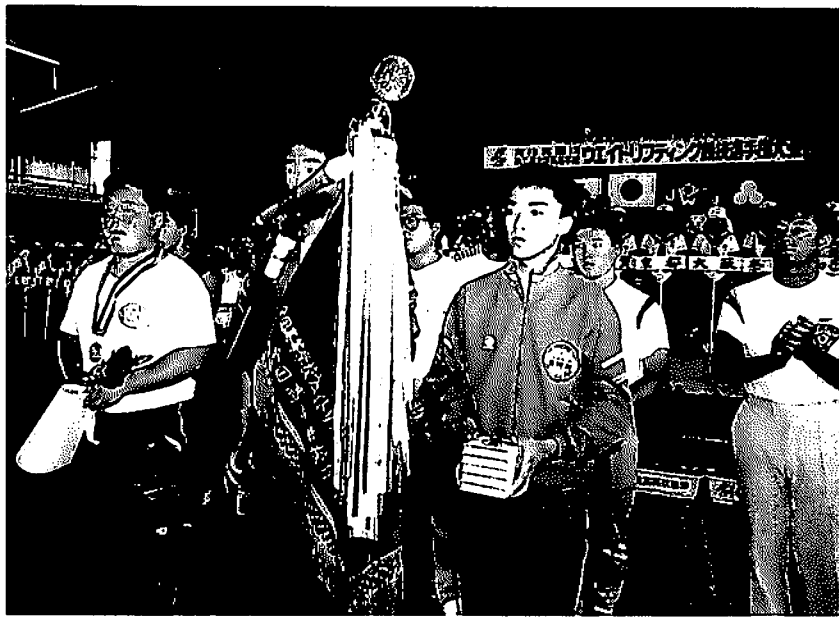
〈全国高校総体〉(於北海道)

団体 準優勝 日川高校
75kg級 小泉 秀一(日川) 2位
90kg級 中川 信二(谷村) 優勝

〈国民体育大会〉(於沖縄県)

団体 準優勝 山梨県
少年 75kg級 小泉 秀一(日川) 優勝
S123.5 日本高校新

成年 75kg級 武井多加志(日川高教) 2位
100kg級 島袋 隆之(谷村高教) 3位
110kg級 松下忠光(東八振興) 2位
〈全日本選手権大会〉(於前橋市)



日川高校が団体優勝を果たした63年度全国高校総体

75kg級 武井多加志(日川教)優勝
 82.5kg級 渡辺 浩幸(法大) 3位
 100kg級 烏袋 隆之(谷村教) 3位
 110kg級 松下忠光(東八振興)優勝
 〈全日本社会人選手権〉(於京都府)
 110kg級 松下忠光(東八振興)優勝
 〈ジュニア世界選手権大会〉(於ユーゴ)
 52kg級 渡辺 博(法大) 12位
 75kg級 渡辺 浩幸(法大) 13位
 〈日韓ユース大会〉(於韓国)
 75kg級 小泉 秀一(日川) 3位
 90kg級 中川 信二(谷村) 2位
 〈パンノニア国際大会〉(於ハンガリー)
 52kg級 渡辺 博(法大) 5位
昭和63年度
 〈関東高校選手権〉(於埼玉県)
 団体 優勝 日川高校
 〈全国高校総体〉(於兵庫県)
 団体 優勝 日川高校
 個人 56kg級 岡部 伸二(日川) 2位
 100kg級 岡田 信彦(日川) 3位
 〈関東選手権〉(於茨城県)
 団体 優勝 山梨県 優勝者6名
 〈国民体育大会〉(於京都府)
 団体 3位 山梨県
 少年 56kg級 岡部 伸二(日川) 2位
 成年 52kg級 渡辺 博(法大) 優勝
 82.5kg級 渡辺 浩幸(法大) 3位
 〈全日本選手権大会〉(於前橋市)
 75kg級 武井多加志(日川教) 2位
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 3位
 82.5kg級 渡辺 浩幸(法大) 3位
 〈ジュニア世界選手権大会〉(於ギリシャ)
 67.5kg級 磯村 賢一(法大) 8位
 75kg級 渡辺 浩幸(法大) 13位
 〈アジア選手権大会〉(於中国)
 82.5kg級 渡辺 浩幸(法大) 6位

平成元年度
 〈関東選手権〉(於東京都)
 団体 優勝 山梨県 優勝者5名
 〈国民体育大会〉(於北海道)
 団体 優勝 山梨県
 少年 56kg級 桐原 正仁(日川) 3・4位
 82.5kg級 佐藤 剛(谷村) 3・3位
 100kg級 若杉 孝一(日川) 3・3位
 成年
 67.5kg級 磯村 賢一(法大) 1・4位
 82.5kg級 渡辺 浩幸(法大) 3・1位
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 3・1位
 110kg級 松下忠光(東八振興) 1・3位
 〈全日本選手権大会〉(於上尾市)
 67.5kg級 磯村 賢一(法大) 2位
 75kg級 武井多加志(吉田教) 3位
 82.5kg級 渡辺 浩幸(NEC) 2位
 100kg級 烏袋 隆之(谷村教) 3位
 100kg級 松下忠光(東八振興) 優勝
 〈全日本社会人選手権〉(於福岡県)
 2位 かいじクラブ
 82.5kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 優勝
 110kg級 松下忠光(東八振興) 優勝
 〈日台親善大会〉(於台湾)
 100kg級 松下忠光(東八振興) 優勝
 〈ブルースォード国際大会〉(於東ドイツ)
 52kg級 渡辺 博(法大) 3位
平成2年度
 〈関東選手権〉(於栃木県)
 団体 優勝 山梨県 優勝者4名
 〈国民体育大会〉(於福岡県)
 団体 3位 山梨県
 少年 60kg級 雨宮 敏之(日川) 一・5位
 67.5kg級 渡辺 直人(日川) 5・5位
 82.5kg級 鶴田 守幸(日川) 5・7位
 成年

82.5kg級 渡辺浩幸(NEC山梨) 2・1位
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 1・3位
 110kg級 松下忠光(石和職) 2・1位
 〈全日本選手権大会〉(於東京都)
 52kg級 渡辺 博(富士急) 優勝
 82.5kg級 渡辺 浩幸(NEC) 2位
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 2位
 〈全日本社会人選手権〉(於石川県)
 2位 かいじクラブ
 82.5kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 優勝
 110kg級 松下 忠光(石和職) 優勝
 〈日韓親善大会〉(於韓国)
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 優勝
 〈第11回アジア競技大会〉(於中国)
 52kg級 渡辺 博(富士急) 5位
 〈世界選手権大会〉(於ハンガリー)
 52kg級 渡辺 博(富士急) 8位
平成3年度
 〈全国高校総体〉(於静岡県)
 団体 7位 日大明誠高校
 個人 60kg級 田中 邦彦(明誠) 2位
 〈関東選手権〉(於埼玉県)
 団体 優勝 山梨県 優勝者8名
 〈国民体育大会〉(於石川県)
 団体 4位 山梨県
 少年 52kg級 小俣 重人(吉田) 3・4位
 90kg級 古屋 将(日川) 8・2位
 成年 52kg級 渡辺 博(富士急) 1・2位
 100kg級 小宮山哲雄(日川教) 2・6位
 110kg級 松下忠光(石和職) 3・2位
 〈全日本選手権大会〉(於東京都)
 52kg級 渡辺 博(富士急) 優勝
 82.5kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝
 110kg級 松下 忠光(石和職) 優勝
 〈全日本社会人選手権〉(於石川県)
 2位 かいじクラブ
 〈世界選手権大会〉(於ドイツ)
 52kg級 渡辺 博(富士急) 6位
平成4年度
 〈全国高校総体〉(於宮崎県)
 個人
 82.5kg級 古屋 和洋(日川) 3位
 +100kg級 小松 政志(明誠) 2位
 〈関東選手権兼中国四川省・山梨県親善大会〉(於吉田高校)
 団体 優勝 山梨県 優勝者10名
 〈国民体育大会〉(於山形県)
 団体 4位 山梨県
 少年 52kg級 小泉 浩一(吉田) 一・8位
 75kg級 米山 喜平(吉田) 8・一
 82.5kg級 古屋 和洋(日川) 2・4位
 成年 52kg級 渡辺 博(富士急) 1・1位
 60kg級 桐原 正仁(日大) 5・1位
 67.5kg級 磯村賢一(牧丘町役場) 6・4位
 110kg級 松下忠光(石和職) 3・1位
 〈全日本選手権大会〉(於千葉県)

52kg級 渡辺 博(富士急) 優勝
 67.5kg級 磯村賢一(牧丘町役場) 3位
 82.5kg級 小泉 秀一(石和教) 2位
 90kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝
 110kg級 松下 忠光(石和職) 2位

〈全日本社会人選手権〉(於徳島県)

2位 かいヒクラブ

90kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝
 110kg級 松下 忠光(石和職) 優勝
 〈ジュニア世界選手権大会〉(於ブルガリア)

60kg級 桐原 正仁(日大) 11位
 〈オリンピック大会〉(バルセロナ)

52kg級 渡辺 博(富士急) 失格
 〈日韓親善大会〉(於韓国)

60kg級 桐原 正仁(日大) 優勝
 〈日中友好大会〉(於中国)

52kg級 渡辺 博(富士急) 2位

平成5年度

〈関東高校大会〉(於千葉県)

団体 優勝 吉田高校

3位 日川高校

個人 4名優勝

〈全国高校総体〉(於栃木県)

団体 3位 吉田高校

7位 日川高校

個人 70kg級 八木 一夫(日川) 2位

76kg級 米山 喜平(吉田) 優勝

” 金子 伸二(日川) 3位

91kg級 岩井 正純(吉田) 2位

+99kg級 堀内 邦彦(吉田) 3位

〈関東選手権〉(於群馬県)

団体 優勝 山梨県 優勝者8名

〈国民体育大会〉(於徳島県)

団体 優勝 山梨県

少年 70kg級 八木 一夫(日川) --3位

76kg級 金子 伸二(日川) 3・1位



平成8年度全国高校総体

83kg級 米山 喜平(吉田) 1・2位

成年 54kg級 渡辺 博(富士急) 2・4位

91kg級 渡辺 浩幸(NEC) 1・1位

99kg級 若杉 孝一(法大) 2・2位

108kg級 松下忠光(日川職) 5・2位

〈全日本選手権大会〉(於千葉県)

54kg級 渡辺 博(富士急) 2位

70kg級 磯村賢一(牧丘町役場) 2位

91kg級 若杉 孝一(法大) 2位

〈全日本社会人選手権〉(於愛知県)

2位 かいヒクラブ

91kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝

108kg級 松下 忠光(日川職) 優勝

〈東アジア大会〉(中国)

54kg級 渡辺 博(富士急) 5位

〈ジュニア世界選手権大会〉(於チェコ)

スロバキア)

76kg級 渡辺 直人(日大) 13位

〈日韓ユース大会〉(韓国)

76kg級 米山 喜平(吉田高) 2位

〈アジアジュニア選手権〉(於中国)

+108kg級 小松 政志(日大) 3位

平成6年度

〈関東高校選手権〉(於栃木県)

団体 優勝 日川高校

2位 吉田高校

個人 優勝者4名

〈全国高校総体〉(於富山県)

団体 5位 日川高校 6位 吉田高校

個人 54kg級 霜村 友也(日川) 失格

S97.5 日本高校新

59kg級 尾上 泉(吉田) 3位

64kg級 鈴木 崇浩(日川) 3位

70kg級 橋本 唯史(明誠) 優勝

76kg級 岡部 正樹(日川) 2位

〈関東選手権〉(於群馬県)

団体 優勝 山梨県 優勝者10名

〈国民体育大会〉(於愛知県)

団体 2位 山梨県

少年 64kg級 鈴木 崇浩(日川) 4・3位

70kg級 橋本 唯史(明誠) 1・4位

76kg級 岡部 正樹(日川) 1・1位

成年 54kg級 渡辺 博(富士急) --6位

91kg級 渡辺 浩幸(NEC) 3・4位

108kg級 松下忠光(日川職) 3・3位

+108kg級 小松 政志(日大) 6・6位

〈全日本社会人選手権〉(於福島県)

2位 かいヒクラブ

64kg級 桐原正仁(佐藤電気) 優勝

54kg級 渡辺 浩幸(NEC) 優勝

〈フレンドシップトーナメント〉(於韓国)

+108kg級 小松 政志(日大) 3位

〈ジュニア世界選手権〉(於インドネシ



第48回東国国体総合優勝の山梨県チーム(平成5年)

ア)

60kg級 田中 邦彦(明誠) 13位
+108kg級 小松 政志(日大) 失格

平成7年度

《関東高校選手権》(於牧丘町)

団体 優勝 吉田高校
2位 日川高校

個人 優勝者5名

《全国高校総体》(於鳥取県)

団体 優勝 吉田高校
2位 日川高校

個人 54kg級 芳賀 寛憲(日川) 2位

76kg級 古谷 竜彦(吉田) 優勝

83kg級 山口 和雄(日川) 2位

99kg級 天野 洋平(吉田) 2位

《関東選手権》(於茨城県)

団体 優勝 山梨県 優勝者11名

《国民体育大会》(於福島県)

団体 2位 山梨県

少年 76kg級 古谷 竜彦(吉田) 1・1位

83kg級 山口 和雄(日川) 5・5位

99kg級 天野 洋平(吉田) 2・2位

成年 76kg級 磯村賢一(牧丘町役場)6・2位

83kg級 渡辺直人(牧丘町役場)3・3位

91kg級 渡辺 浩幸(NEC) 4・2位

108kg級 松下忠光(日川職) 4・7位

《全日本選手権大会》(於福島県)

64kg級 桐原正仁(佐藤電機) 2位

76kg級 磯村賢一(牧丘町役場) 2位

83kg級 渡辺直人(牧丘町役場) 3位

91kg級 渡辺 浩幸(NEC) 3位

+108kg級 小松 政志(日大) 3位

《全日本社会人選手権》(於広島県)

優勝 かいじクラブ

59kg級 岡部伸二(日川教) 優勝

《日韓ユース大会》(於韓国)

76kg級 古谷 竜彦(吉田) 2位

108kg級 天野 洋平(吉田) 2位

《アジア選手権》(於韓国)

+108kg級 小松 政志(日大) 3位

《フレンドシップトーナメント》(於中国)

+108kg級 小松 政志(日大) 4位

平成8年度

《関東高校大会》(於埼玉県)

団体 優勝 日川高校
3位 吉田高校

個人 優勝者4名

《全国高校総体》(於牧丘町)

団体 優勝 日川高校
8位 吉田高校

個人 59kg級 今村 俊雄(日川) 3位

70kg級 千葉 真一(吉田) 2位

83kg級 大家 清人(日川) 3位

《現役員》

会 長 村田 一郎

副 会 長 種田 一夫

理 事 長 土屋 義仁

理 事 岡田 隆 檜垣 英治

笠原 遼夫 武井多加志

小宮山哲雄 島袋 隆之

松下 忠光 深澤桂一郎